

第5章 京都大学構内における分布調査・立合調査

千葉 豊 伊藤淳史 富井 眞

第1章に記したように、2004～2006年度に京都大学構内で実施した分布・立合調査は16件である。このうち、桂キャンパスの1件、芦生研究林構内の1件、本部構内の3件、北部構内の2件については、重要な知見が得られたので、ここで報告しておきたい。なお、桂キャンパスについては、2001・2003年度の分布・立合調査の成果もまとめて詳述する。

1 京都大学 桂キャンパスにおける分布・立合調査

調査の概要 京都大学桂キャンパスは、TechnologyとScienceが融合するテクノサイエンス・ヒルの形成を目指して、1999年9月に工学研究科・情報学研究科の新キャンパスとして認められた。キャンパスは京都市西京区京都大学桂に所在し、敷地内は、A～Dの4つのクラスターに分かれている。2001年2月、Aクラスターでの総合研究棟建設工事の着工をはじめとして、順次、建物の建設工事が進行している（図23）。

4つのクラスターのうち、A～Cの3クラスターについては、その用地は住宅・都市整備公団によってすでに宅地開発されている。一方、Dクラスターについては、その北西側

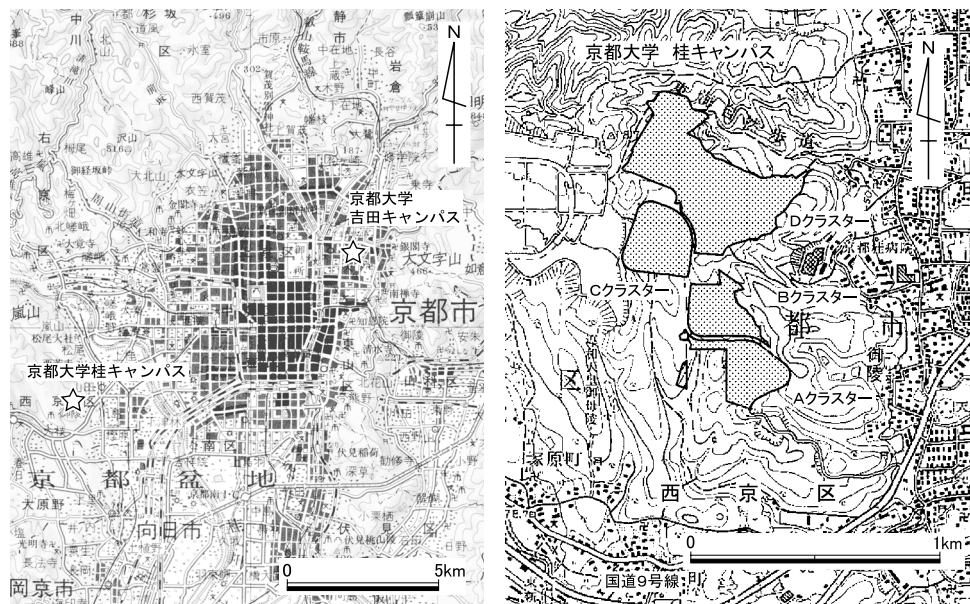


図23 桂キャンパスの位置 左：1/25万，右：1/3万

一帯が鎌倉時代創建の法華山寺および戦国時代の山城・峰ヶ堂城の範囲内となっており、山田桜谷古墳群および山田谷田山古墓群が北に隣接する地点に分布している〔京都市文化市民局2007〕。現況が山林や竹林で開発の手がほとんど及んでいないことから、遺跡登録地点についてはその状況を、遺跡として認定されていない地点については埋蔵文化財の有無を確認する必要がある。

このため、2001年11月20日、2004年1月28日、2004年7月1日の3回に分けて、Dクラスター全域の分布調査をおこなった。また2003年度には、Dクラスター内に調整池および工事用の取り付け道路の設置が計画されたため、2003年6月23日と2004年3月9日に立合調査を実施した。本報告は、2001年度～2004年度までにおこなった分布・立合調査の成果をまとめたものである。

なお、住宅・都市整備公団による宅地開発に先だって、A～Dクラスターを含む広範囲の分布・試掘調査が京都市埋蔵文化財研究所によっておこなわれている〔京都市埋文研1991〕。またDクラスターの北西側一帯が含まれる法華山寺跡（峰ヶ堂城跡）については、京都大学考古学研究会による詳細な分布・測量調査がおこなわれている〔京大考古研1992・94・95〕。この報告では、曲輪等に比定される平坦面に地点名がふられているので、今回の報告でもそれを併記しておきたい。

調査の成果（図24・25） 分布調査の成果を図24に記した地点ごとに列記する。

A地点：Dクラスター西北隅に位置するA地点には、明らかに人為的に造作されたと思われる平坦面がみられる。平坦面は3ヶ所確認でき、もっとも大きな平坦面は長さ60m、幅15m前後で、北東―南西方向に伸びる。この平坦面の北端、東側斜面下に、長さ・幅ともに10m前後の小規模な平坦面が2つ東西に並んで存在する。遺物は採集していないが、竹林ではないので相当古い遺構とみてよい。法華山寺ないしは峰ヶ堂城に関連する可能性がある。京大考古研がE平坦地群と名付けた地点にあたる。

B地点：Dクラスター中央北辺に位置する。尾根上に、人為的と思われる小さな平坦面がいくつか点在する。ただしこの地点付近には竹林が広がっており、竹林開発にともなうものの可能性が高い。

C地点：埋蔵文化財ではないが、調整池から西へ100～150m離れた工事用道路の北側切り通しで、断層を確認した。断層は、東が高く西が低くなっているようにみえる。破碎帯もともなっていた。西山断層群のひとつと思われる。

D地点：A地点から南へ100～150mの地点。この地点にも小規模ながら平坦面が確認

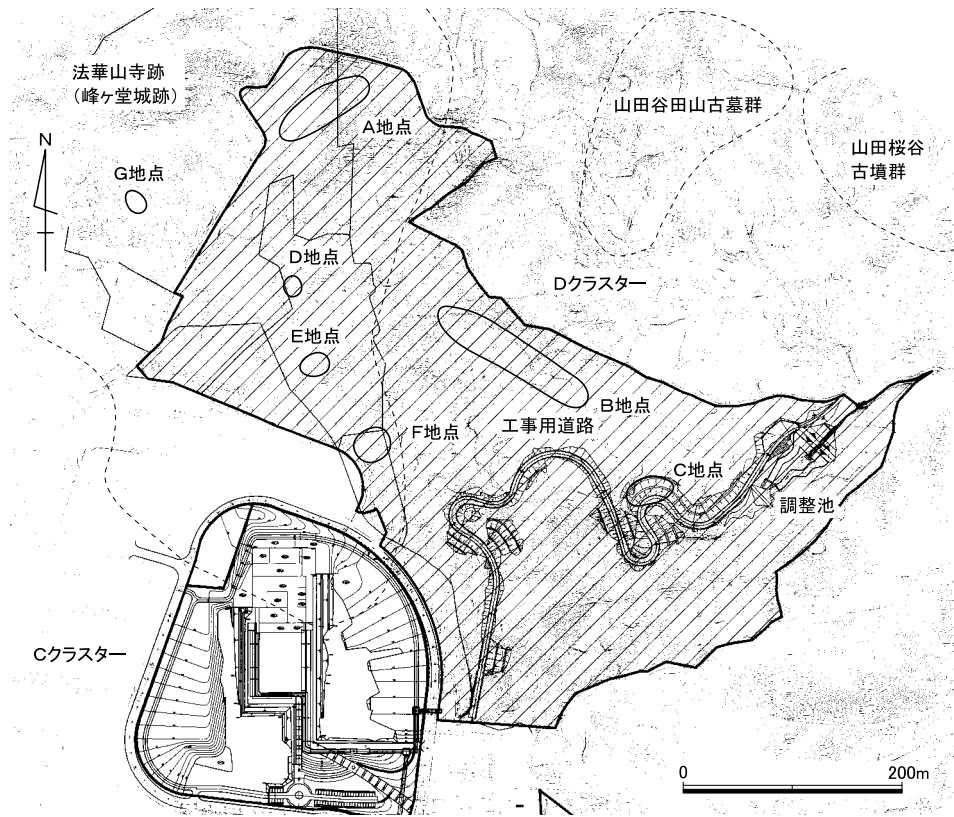


図24 分布調査地点 縮尺1/7000

できたが、現況が竹藪であり、竹林開発にともなう可能性が高い。

E地点：D地点から南へ70mの地点。谷状地形の奥部で、小規模な石垣を確認した。谷部を遮るように礫が野面積みされている。最大高1.2mをはかる。砂防堰堤と想定するが、構築年代は不明である。なおCクラスター内で、京都市埋蔵文化財研究所が試掘調査した「土手状遺構」は谷部をアーチ状に遮り裾部に礫を並べていて、砂防堰堤と想定されている〔京都市埋文研1991, pp.148－149〕。出土遺物から、江戸時代後半以降と考えられており、本地点の遺構の性格と年代を考える材料となろう。

F地点：E地点から南東90m前後で、京大考古研が中世の遺物を採集した地点。今回の踏査では、遺物の採集はできなかった。京大考古研のQ平坦地にあたる。

G地点：桂キャンパスの範囲外であるが、Dクラスター内に展開する法華山寺（峰ヶ堂城）の性格を明らかにする上で重要と考え、あわせて踏査をおこなった。京大考古研のT平坦地群。過去の踏査で、瓦塼類を主体とした多くの遺物が採集されており、法華山寺

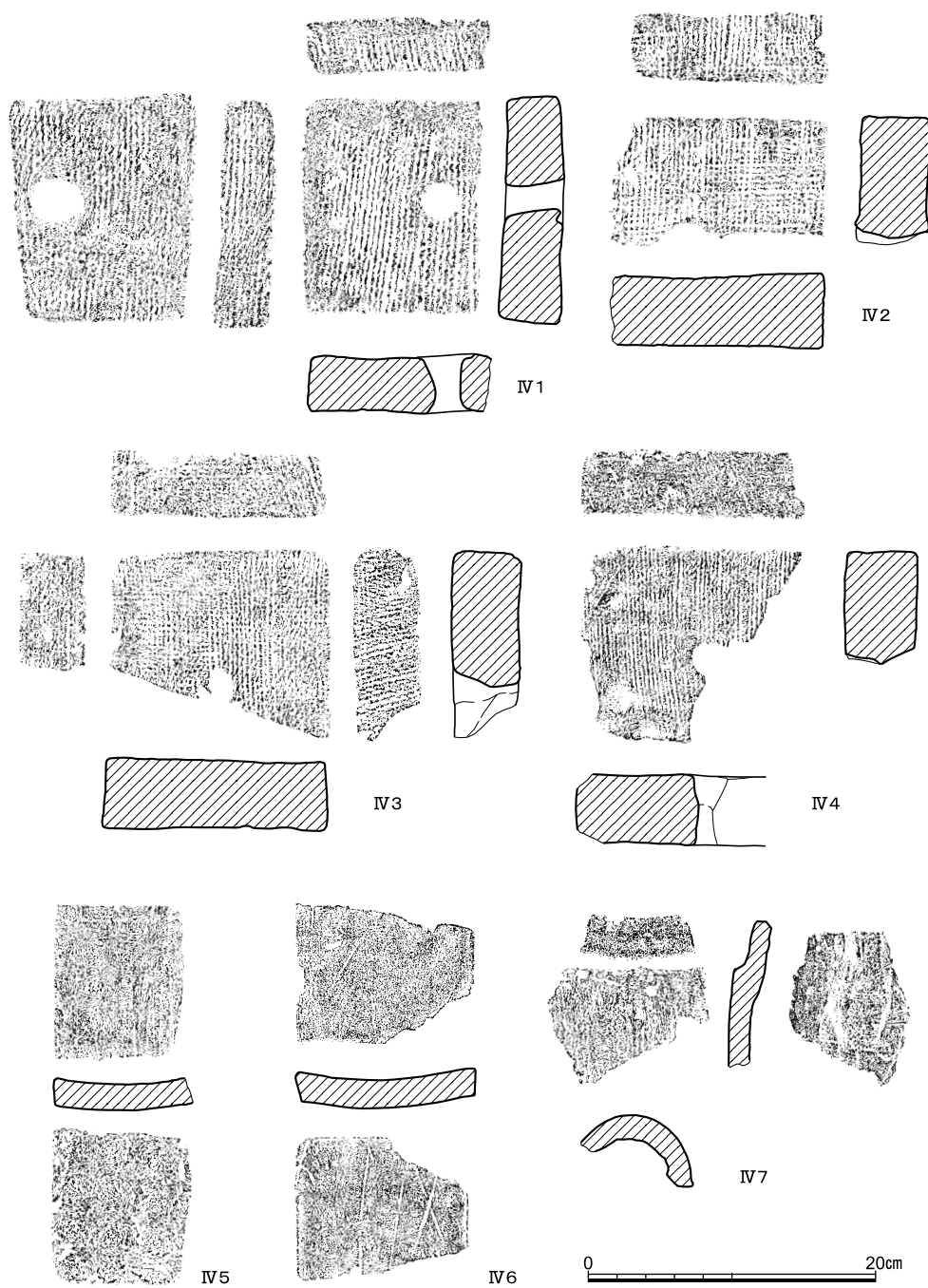


図25 G地点採集遺物 (IV1～IV4 塼, IV5・IV6 平瓦, IV7 丸瓦) 縮尺1/5

(峰ヶ堂城) 遺跡の中心的な部分にあたると思われる地点である。

T平坦地群の中で、TCと名付けられた標高の最も高い平坦地には、現在鉄塔が設置されているものの、その周囲に点在する平坦地群は比較的よく保存されている。そしてTC平坦地の北東側は、急な斜面となっているが、この斜面地には遺物が散在していた。

図25は、この地点で採集した遺物である。IV 1～IV 4は塼。いずれも全面に、縄叩きを施し、孔を穿つ。縄叩きは、長軸ないしは短軸のどちらかの方向にはほぼ平行するように施されるが、IV 2・IV 3のように90度直交させ重複して叩いているものもある。孔は両側からあけられており、開口部の直径は2～4 cmである。法量は短辺が15～16 cm、厚さが4～5 cm前後。長辺は完形品がないため不明であるが、京大考古研の採集品に類似品があり、それによれば、33.5 cm前後で、孔も2孔となるようである。IV 5・IV 6は平瓦。IV 7は玉縁のつく小型の丸瓦。凹面側の端部には面取りを施す。凸面に縦方向の縄叩きをもち、それを横方向の撫でによって消している。拓本でははっきりしないが、凸面に「×」の筆記号がある。

ま と め 法華山寺(峰ヶ堂城)の範囲内に含まれるDクラスター西半を中心として、遺跡の存在を想定させる観察所見を得た。また東半でも人為的と思われる平坦地を確認した。これらは最近の竹林開発にともなう可能性が高いとはいえ、さらに年代的に遡る可能性も捨て切れない。またE地点で発見した石垣については、その設置年代や用途・構造などをさらに調査する必要があるだろう。

以上の事実から、遺跡として登録されているDクラスターの西側一帯はもちろんのこと、現状では遺跡の範囲外となっている東側部分についても、中世寺院や戦国期山城の付帯的施設あるいは近世遺跡が展開している可能性を考慮すべきである。Dクラスターは、調整池や工事用道路の設置はあったものの、大部分の土地については未開発のままである。山林・竹林という現況であるので、分布調査は十分とはいえない。将来的な開発においては、さらに詳細な分布・試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認し、文化財保護の観点から必要な措置を講じつつ建物配置などの計画をしてゆく必要があることを指摘しておきたい。

分布調査および立会調査の参加者は以下の通り。清水芳裕(2001年11月20日・03年6月23日・04年3月9日)、千葉豊(全日程)、富井眞(2004年1月28日)、長尾玲(2004年1月28日・同年7月1日)。また、調査にあたっては、施設部担当職員および工事関係者のご協力をいただきました。末尾ながら記し、お礼申し上げます。(千葉 豊)

2 芦生研究林構内の立合調査

京丹波町（旧美山町）に所在するフィールド科学教育センター森林ステーション芦生（あしゅう）研究林は、京都市中心部から北に約35km、福井県と滋賀県に接する京都府北東部の由良川源流域に位置する（図26）。今回、研究林事務所（標高356m）構内に下水道施設整備が計画されたため、2004年10月29日に立合調査を実施した。

立合は、事務所構内のうち、職員宿舍棟などが立ち並ぶ平坦地を東西方向に横断する管路掘削工事にあわせて要所でおこなった（図版9）。いずれの地点でも、表土下に褐色や灰色の粘土層が安定して認められ、以下深さ2m程度まで粗砂層・砂礫層・粘土層が互層に水平堆積していた。大学敷地となる以前は水田であったとのことで、表土下の粘土層はその時期の耕作土層であろう。それ以下の堆積は、構内南側を流れる由良川に由来する自然堆積層とみられる。このように今回は、どの層からも人工遺物や人為的な地形改変の痕跡などは確認されなかったが、確認された粘土層のうちには、土壌化の進行した黒色腐食土層もあり、過去の一時期に湿地的な環境にあったことがうかがわれ、注意される。

芦生研究林の敷地内には、周知の遺跡は登録されておらず、また考古学的な調査が実施された履歴もない。今回は、広大な研究林敷地内の、それも事務所構内の一部というごく限られた知見であり、遺跡の存否を判断する材料はまだ無きに等しいと言ってよい。山城・丹波・若狭・近江の諸地域が境を接する内陸の山間地にも、各時代の豊富な文化財が存在することは良く知られており、今後も調査を継続していく必要があろう。（伊藤淳史）



図26 芦生研究林と立合調査地点の位置（左：縮尺1/50万，右：縮尺1/5万）

3 本部構内の立合調査

吉田キャンパスの本部構内南半部では、多数の調査機会があった。以下に内容別に整理して報告しておく（図27）。

(1) 尾張藩邸に関連する調査成果

堀 本部構内の西半部に比定される幕末期の尾張藩吉田屋敷にともなう遺構としては、周囲を囲む堀があり、これまでに、75・89地点で東南隅のコーナー部が検出されているほか、188地点や293地点で南辺が把握され、277地点西壁際でも西辺とみられる落ち込みが確認されている。今回、335地点において、現地表下30cmの深さにおいて東西方向にはしる大規模な溝を検出した（図版10-2）。深さの確認には至っていないが、上面で幅4m強をはかる規模や、内部に黄色砂がブロック状に厚く埋積している様子は、75・89地点で確認された状況によく一致していることから、藩邸南辺の堀と判断した。遺物は少量しか得ていない（IV8・IV9）。『吉田御屋敷惣図』（名古屋市蓬左文庫蔵）では、南側中央付近には門と入り口があり、堀が途切れるように表現されているが、今回の調査範囲でそうした陸橋部は確認されなかった。なおこのほか、本部構内西縁の326地点の立合でも西辺の堀の確認が予想されたが、調査範囲内では検出されなかった。さらに西側に位置していたため、東大路通り拡幅により削平されてしまっている可能性が高い。

中央屋敷 『吉田御屋敷惣図』には、藩邸内の南半に政務や饗応の御殿空間とみられる屋敷風の建物や池泉が描かれている。これらに関する遺構については、296地点の調査において、近傍での瓦葺き建物の存在を知らしめる瓦溜まりや、池のものとみられる白色粗砂のひろがりが見つかった。今回296地点の北側一帯でひろく立合を実施し、329e・336a・336b地点で近世遺物を大量に包含する白色粗砂を多量にまじえた灰褐色土層を確認した（図版10-4）。藩邸廃絶後に、地泉やそれにつながる流路に廃棄された遺物群と想定する（IV10～IV49）。これまで本部構内で出土してきた藩邸関連の遺物は、陶器類に偏りがあり、染付磁器は少なかったが、今回は一定量が出土している。また、296地点出土品と同一個体となる可能性もある西洋陶器片も得ている（IV45）。この一帯が饗応空間として重要な位置にあったことがあらためて裏付けられたものといえよう。

(2) 中世・近世白川道に関連する調査成果

京の荒神口から近江坂本を結ぶ中世・近世の白川道は、本部構内を南西―北東方向に通る、これまでも各所で路面が確認されてきた。今回近世については、329f・331地点で路

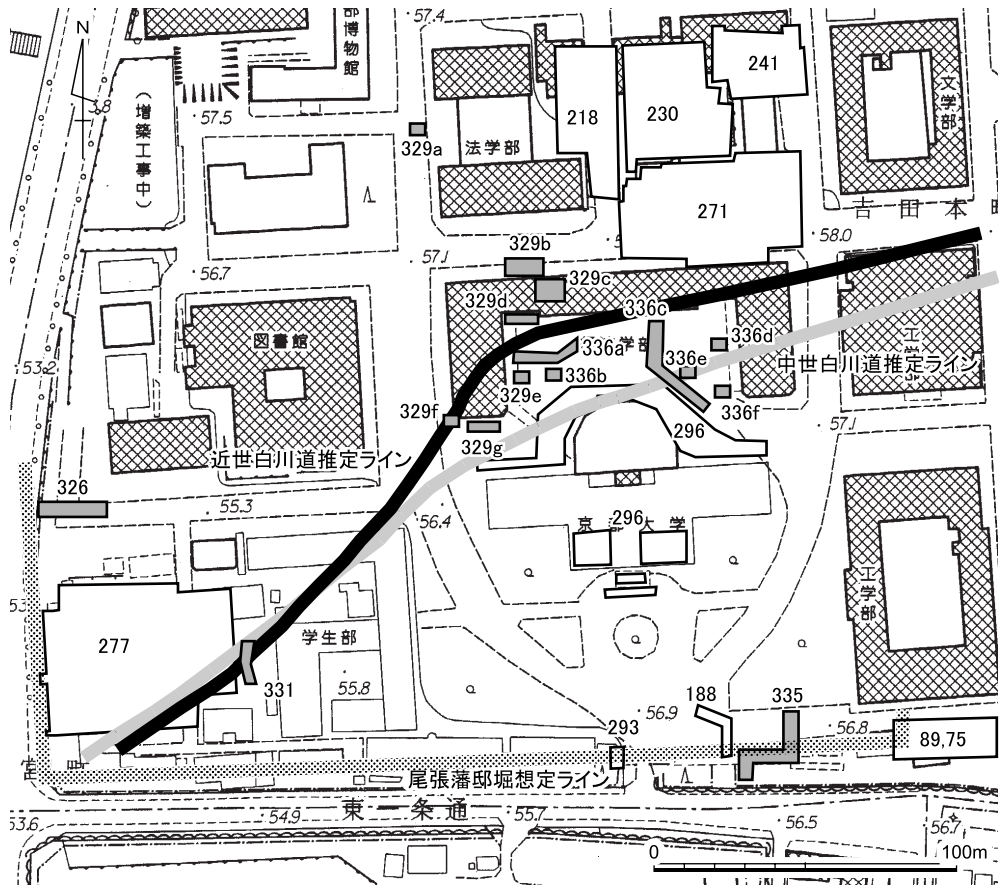


図27 本部構内の関連調査地点（梨地の地区が本年報関連の立合調査地点） 縮尺1/2500

面が確認された。中世については、336 d・e 地点で硬化面を確認した。296地点の調査では中世白川道のみが確認されており、近世白川道がどの程度北に離れてはしているかが課題となるところであったが、336 a 地点や329 c・d 地点でなどでは路面が確認されなかったことも考慮して、(図27) に示すようなルートが描き得るようになった。

(3) その他の調査成果

先史時代の地形 弥生前期末の土石流堆積層である黄砂は、本部構内西半を中心に厚い堆積が確認されてきた。今回も326・329 b 地点などで、その直下の弥生前期以前遺物の包含層とみられる黒褐色土層とともに良好に確認された（図版11-2・4）。黄砂は、326 地点では厚さ1 m以上をはかり、下層黒褐色土層はほぼ水平堆積であった。329 b 地点では、現地表下約1 mの標高56.1m付近に黄砂の上面があり、下層黒褐色土層は標高55.3～

本部構内の立合調査

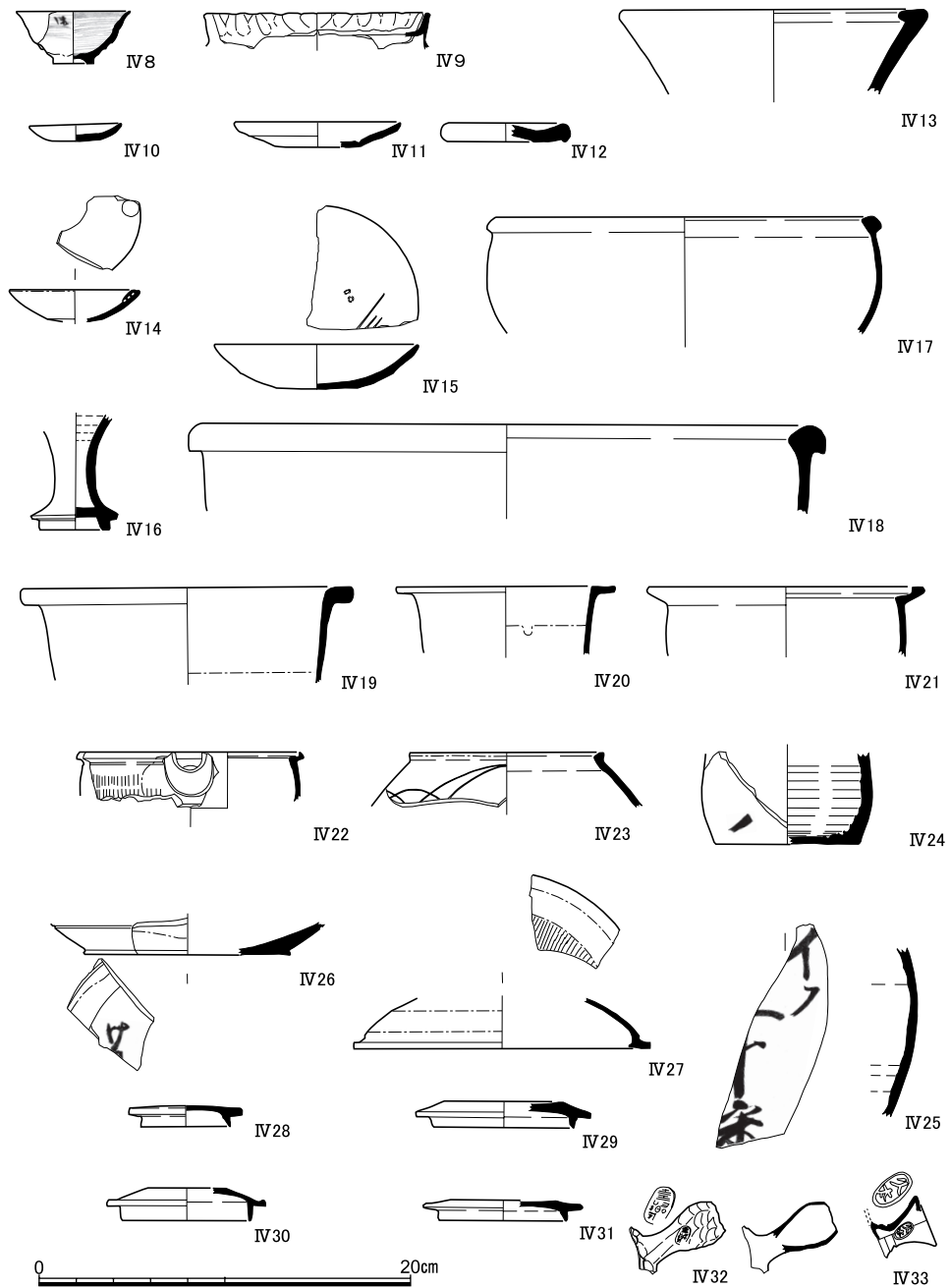


図28 335地点尾張藩邸堀埋土出土遺物 (IV 8・IV 9 陶器), 336 a・b 地点白色粗砂混じり灰褐色土(1) (IV10～IV13土師器, IV14～IV33陶器)

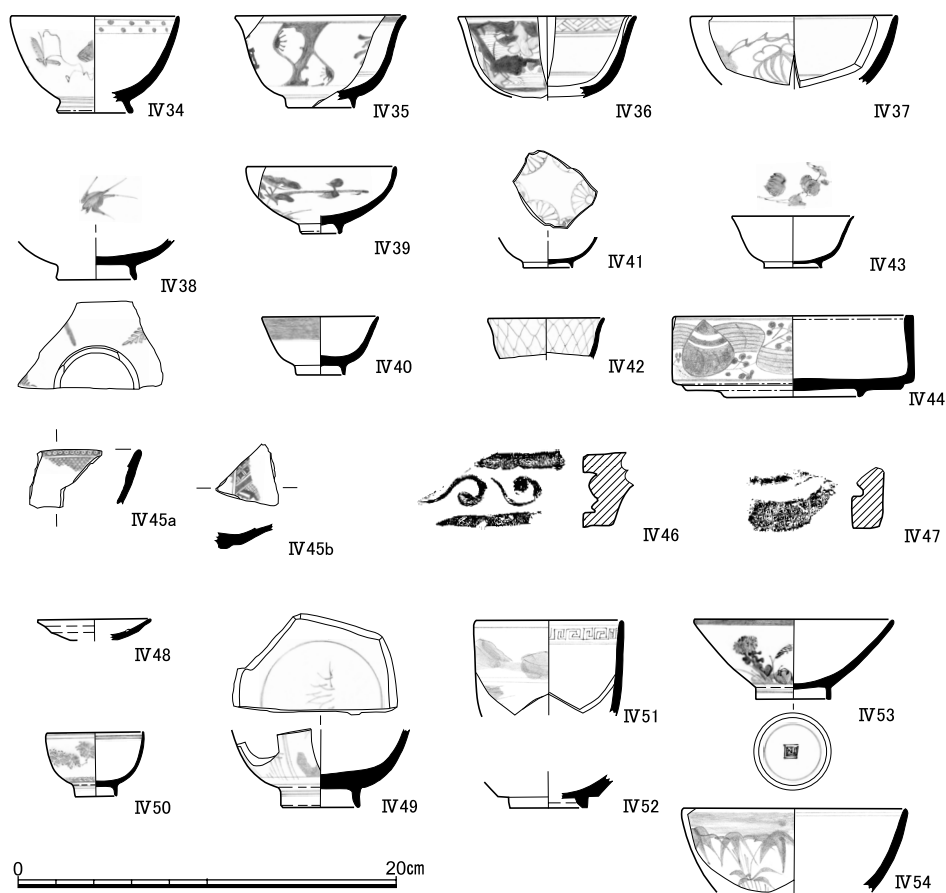


図29 336 a・b 地点白色粗砂混じり灰褐色土出土遺物(2) (IV34～IV3744, IV45 a・b 西洋陶器, IV46・IV47 軒平瓦), 329 e 地点白色粗砂層出土遺物 (IV48 陶器, IV49 磁器), 329 f 地点白色粗砂層出土遺物 (IV50～IV53 磁器), 329 f 地点路面層出土遺物 (IV54 磁器)

55.6mと西へと下る斜面地形をなしていた。よって黄砂は西へむかい厚くなる。黒褐色土層からは縄文後期～晩期とみられる無文の粗製土器片が少量出土した。北側の218地点において、黄砂で埋積した西側へ急激に下る斜面地形が検出され、縄文後期中葉の遺物が出土している。今回の成果と関連づけられるであろう。

近代煉瓦積み水路の確認 329 a 地点において煉瓦積の水路が見つかった(図版11-6)。南北方向にはしりながら、この地点で西へ屈曲するようであり、現在も共同溝として利用されている。旧制第三高等学校や京都帝国大学時代の水路である可能性があり、今後機会を得て検証を続けていく必要がある。(伊藤淳史)

4 京都大学北部構内B D30・33区の立合調査

2003年度から継続していた北部構内の配管工事にもなう立合調査(図30-311地点)と、2005年度から始まった農学部総合館耐震補強工事にもなう総合館の立合調査(同330地点)では、弥生時代前期末の土石流堆積(「黄色砂」)およびその直前の旧地形などに関して、重要な成果が得られた(図30・31)。

311地点の調査 農生命総合研究棟の新営に附帯する配管工事にもない、2004年4～5月にかけて、農学部東門から北に延びる道路の東辺で立合調査をおこなった。東門から北部構内に入っておよそ15～20mの地点(図30-イ地点)では、南北方向に近接して並ぶ2基の野壺を検出した。構内座標でX=2050辺りである。上面は現代の地層に削平されているが、近世の遺物包含層である灰褐色土の堆積中ないし堆積後に構築されている。遺物は回収できなかったが、漆喰製であることから、江戸時代後期以降に築かれたと判断する。16世紀以降に敷設され京都大学が北部構内を買収した大正年間にも存在していた、221地点の西辺で検出された南北方向の道路は[千葉1998]、この延長線上に位置していることから、イ地点の東側に道路が存在すると思われる。

X=2130辺りと思われる基礎物理学研究所の西南部では(図30・31-ウ地点)、中世の

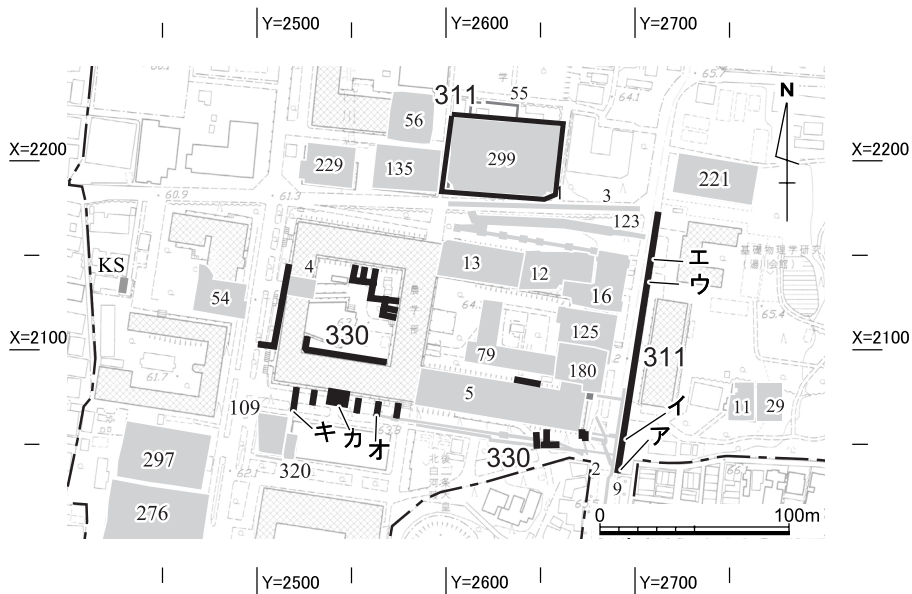


図30 調査地点の位置 縮尺1/4000

京都大学構内における分布調査・立合調査

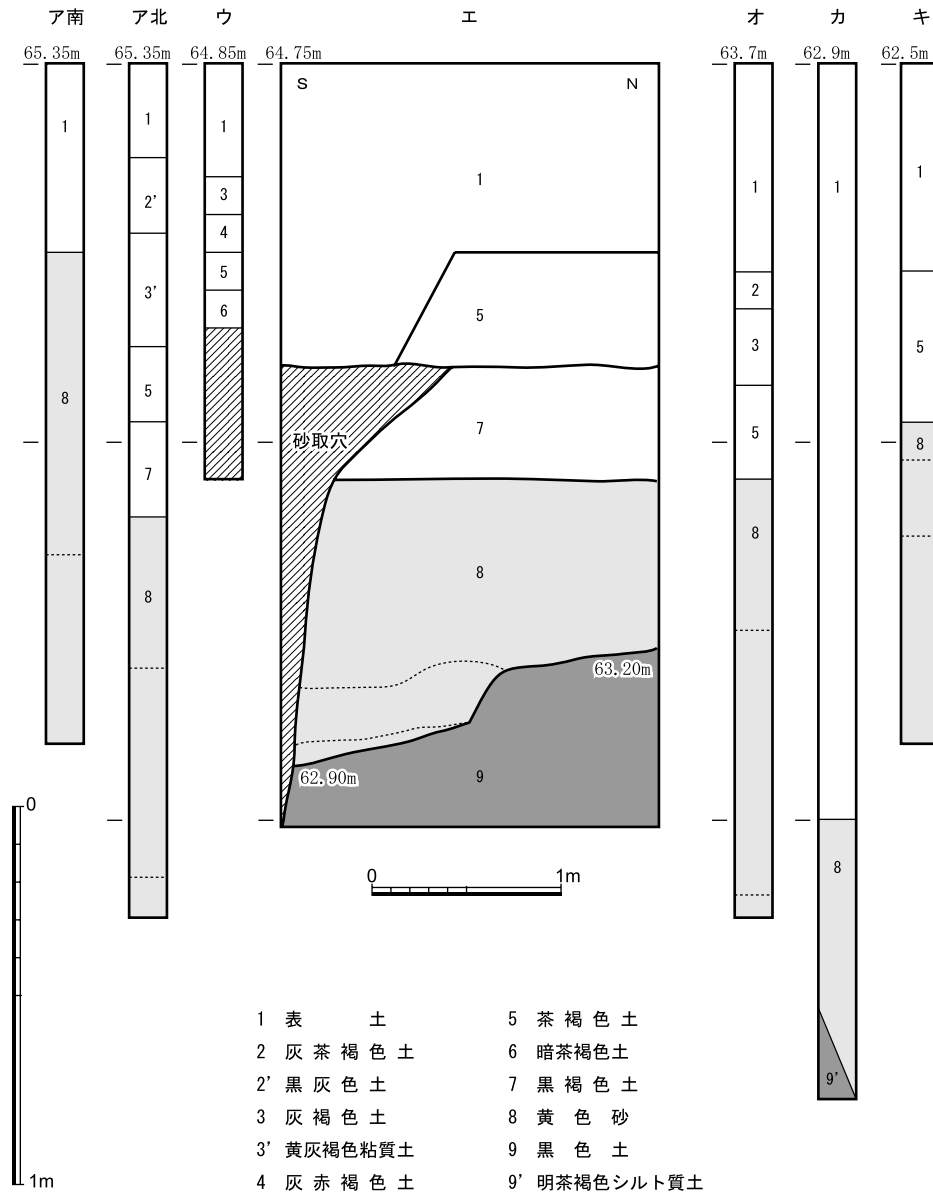


図31 各地点の層位模式図 縮尺：垂直方向1/20，水平方向1/40

遺物包含層である茶褐色土の下位で、しまりのない暗茶褐色土が上部に堆積してその下位には砂層や黒褐色土が筋状に堆積する状況が確認できた。砂取り穴の埋土と判断する。基礎物理研究所の正面でも、茶褐色土の下位にしまりのない黒褐色土の堆積を確認でき、これも砂取り穴埋土の可能性がある。ウ地点の約50m北北西に位置する221地点でも、調査区西辺で中世前半期の砂取り穴が検出されているので〔千葉1998〕、それと一連のものと考えたい。

弥生時代前期末の土石流堆積物である黄色砂は、農学部東門から北部構内に入っておよそ5mの地点から、北に5mほどまでの間、構内座標でX=2040前後では(図30-ア地点)、現地表下120cmまでにその上面を確認できる。また、農学部総合館西北の建物入り口あたり、構内座標でX=2150前後まで北上した地点でも(同エ地点)、現地表下約120cmの深さで確認できる。この両地点の間は、基本的に、現地表下100cmでは黒褐色土ないしは茶褐色土が認められ、黄色砂の分布を確認できない。東門から北5mあたりでは(図31-ア南)、現地表下50cmで表土の直下に黄色砂が認められ、残存厚だけでも130cm以上ある。下半の方が粒径がいくぶん大きい。掘削最深部でも粒径5mm大の礫も多数含まれているので、弥生時代旧地表面は、おそらくこれよりも30cm以上は下位に位置していただろう。東門から北10mのあたりでも(図31-ア北)、標高64.1mほどで黒褐色土から漸次的に移行していく黄色砂が、同様に、その100cm下位の掘削最深部でも5mm大の礫を多数含んでいた。断面を細かく観察すると、単純に上方粗粒化するわけではなく、下半は最深部よりは細粒化しており、それから上方粗粒化して上半ではもっとも粒度が大きくなっている。

農学部総合館西北の建物入り口あたりのX=2140付近では(図30・31-エ地点)、黄色砂に覆われた南へ傾斜する弥生前期の旧地表面を確認できた。南北2m余りの長さにわたってその旧地形の残存を確認でき、北側で標高63.2m、南側では62.9mを測る。この傾斜は16地点東壁で確認されていた南落ち地形〔泉ほか1977〕に対応するのだろう。南落ちの傾斜がきつくなるまでは、粒径の大きい黄色砂が旧地表直上を覆う。傾斜がきつくなってからは、旧地表の直上には、黄白色シルトが南に進むにつれて徐々に厚みを増しながらも薄く堆積し、その上位にはやや白みがかって粒径の小さい黄色細砂が堆積している。エ地点の北側は2m北までは黄色砂の堆積を確認できたが、4m北では、100cmの掘削深度では黄色砂を確認できなかった。

330地点の調査 農学総合館西半の南辺、構内座標でX=2070・Y=2540辺りに(図30・31-カ地点)、弥生時代前期末の旧地表面を確認した。旧地表は、土壌化があまり進んでい

ない明茶褐色のシルト質土で、標高60.4mほどで緩やかに西へ傾斜している。直上を黄白色のシルトないし微砂に覆われている。掘削域では、旧地表の残存は南壁付近に限られるが、それでも、南壁中央から西北西に向かって、この旧地表の南側が黄色砂に削り去られている状況が確認できた。30m西南西に位置する109地点および320地点では、これに対応すると思われる、旧地表の北側が抉られている状況を確認しているので、〔浜崎1983, 千葉2009（＝本年報第2章）〕, 土石流の「本流」は、カ地点とこの2地点との間を西流していったことがわかる。この辺りで幅約20mということになる。

明茶褐色シルト質土が本来堆積していたであろう辺りの深さまで堆積している黄色砂は、壁面観察によれば、粒径が3mm程度までの風化花崗岩粒から成るが、上流の旧地表を抉ったことを物語る、明茶褐色シルト質土のブロックも散見できた。黄色砂は、上部を現代の地中構築物によって削平されており、旧地表よりも50cmほど上方までしか残存していないが、上方粗粒化していることは確認できる。すなわち、旧地表より数十cm上位では、粒径が5mmを超える粗砂が主体的で、その中には50～200mm大のチャートや花崗岩の礫が多数認められ、角礫も目立っていた。

黄色砂の厚い堆積は、カ地点の上流に相当する東方でも（図30・31ーオ地点）、下流に位置する西方でも（同キ地点）、それぞれ確認することができた。上流のオ地点では、確認できた115cmの堆積厚のうち、最下位では、100mm前後の角礫が目立ち、しかも、花崗岩だけでなくチャートなどの堆積岩も少なからず含まれている。その上位は、粒径5mm程度までの風化花崗岩粒から成る。一方、黄色砂残存部の上部40cmほどは、それ以深よりも粒径の小さい風化花崗岩粒が堆積していて、粒径が3mmを超えるようなものはほとんどなかった。従って、このオ地点では、全体的に上方細粒化の傾向がうかがえることになる。

下流のキ地点では、確認できた85cmの堆積のうち、最上部の約10cmを除く上半の粒径が最も大きく、10～100mmの花崗岩礫も含まれていた。最上部と下半の風化花崗岩粒の粒径は、比較的小さいけれども、それでも5mm程度のものは含まれている。カ地点に比較的類似した層相と言える。キ地点では、上方粗粒化した後に細粒化が認められることになる。

（富井 眞）